関西自然保護機構会報16(1)： 1--2，1994

巻頭言

「環境」について考える

滋賀県立（仮称）琵琶湖博物館開設準備室　布　谷　知　夫

もうずいぶん前の話ですが，朝日新聞の朝刊にとてもおもしろい記事がでました。ある小学校で，給食の食器を食後に返す時，食器を洗う水を汚さないようにするために各自がティッシュペーパーでふいてから返すように指導しており，すっかりそれが定着していたのに，こんどはそれが資源の無駄使いだという指摘がされ，ティッシュを使うことをやめたという話です。子供が登校する時にティッシュを持っていかなくなったために，親がそのことに気付き，「水を守る」意見と「資源を守る」意見とで論争になっているということでした。さほどむつかしい問題ではないはずですが，実際にはこの手の話なら，いくらでもあげることができるでしょう。

またこれは私自身の経験ですが，私は牛乳の紙パックを使うよりも，瓶を使用して回収し，瓶を再使用するほうが環境にやさしいと信じていました。ところがある雑誌で，瓶は非常に重たいために，瓶を使った場合に必要になる，運送用の車の数とガソリンの量と排気物量を紙パックの場合と比較し，さらに瓶の洗浄のための薬品や湯の量とそのエネルギーを知らされて，驚いたことがあります。瓶のほうがいいとは，必ずしも言えないらしいのです。表面だけを見て環境にやさしいと思っていたのに，実際には情報を知らない者にとってはブラックボックスがあって，思っていたことが必ずしもそうではない場合がある。それが普通にはわからない，というのは恐ろしいことです。

これに自然がからむと，さらに複雑な話になります。これも雑誌で読んだ話ですが，吉野山の桜がかなりの率で枯れはじめたそうです。いくつかの原因があるそうですが，根本的な原因は住民が日常的な手入れをしなくなったことのようです。昔は半分以上は地域の義務としてやらされていたのでしょうが，近くの住民が毎日様子を見ながら，手入れをし，肥料をやり，大事にして育てたそうです。ところが今は観光課と保勝会ができて，税金と会費で手入れをやってくれるから，住民は何もしなくてもいい。そして何もしなくていいという状態は桜に対する関心を薄め，これまでは観光用というだけではなく，地域の共通財産としての桜であったはずが，地域のくらしとは関係がなくなってしまったのでしょう。その結果として，気がつくと桜が枯れ始めていたというわけです。

最近はホタルもよく話題になります。住民が自然な川をあぶないからという理由で，役所に河川改修を要求し，三面護岸のきれいな川にした後で，今度はホタルがいなくなったと注文をつける。注文をつけられた役所は，困ってしまってホタルの養殖を行い，毎年放す。こんなことが全国各地で起っています。

人間の社会の中だけの環境問題であれば，まだ理詰めで議論ができる素地があるように思います。人によって価値観が違うわけですから，その価値観の基準を決めさえすれば，少なくとも共通の土俵で議論をすることができるでしょう。例えば，人間が生きていくためには一定の開発や資源の消費はしかたがないので，その量を少なくするということを前提にして議論をするのであれば，例えば先の給食の例も，どちらが環境にやさしいのか

を計算することすら可能です。この件について新聞にのっていた堺市教育研究所の人のコメントは，どうしたらいいのかを生徒に調べさせるのが教育ではないか，というものでしたが，それは納得のできる意見であると私も思いました。

でも人間のくらしに自然がからむと，なかなか一筋縄ではいきません。仮に人間主体で考えていいとしても，自然に対する価値観は共通の基準を作ることができないでしょう。まして人間主体だけで考えるべきではないというのが，現在の流れです。

この袋小路から抜けだすための方法は，ひとつには個々の生物の生活史や生態を良く知ることでしょう。まだ個々の生物の研究自体もそこまで進んでいないわけですが，環境の変化に対して個々の生物がどのように対応をするのかを知り，同時にその総合化の中から，生物どうしのつながりを見ることでしょう。生物の研究や生態学的な知識はそのための大きな武器になるはずです。

でも知識を学ぶことは必要ですが，それだけでは自然に対する価値観を育てることはできません。人間も含めて，生物には自分にとってくらしやすい環境があり，その環境は同じではない，生物によって違うということを理解することが大切なのだと思います。例えばカワウにとってくらしやすい環境とサギにとっての環境と人の環境が同じではない以上，共存をするためにはどこかに折り合いをつけて解決をする必要がありますが，その議論をはじめる前提として，好む環境が違う，ということをまず認めることでしょう。

そしてそういう立場の考えを持つ人をふやすためには，結局，言い尽くされた結論ですが，野外へ出て，自然とふれあう中で感じ取るのが最良であり，同時に最短の道でしょう。

昔から，自然観察の世界では子供のころの原体験ということを重視し，よく議論をしたものですが，年齢には関係なく，それぞれの人が目の前にある自然とのふれあいを，意識的にすることができるような，そんな機会を数多く作ることがまず第一だと思います。

*　　*

さて，ここまでの原稿は実は一年以上前に書いたものを少し手直ししたものです。タネあかしをすると，博物館の展示を作るための議論の中で，展示のイメージを作るために書いたものです。

現在準備中の琵琶湖博物館では，「環境」というテーマの展示室があり，その展示室の最後のテーマは「環境とはなんだろう」というものです。展示室の基本的なコンセプトや展示の流れは早くから決まっていたのですが，ただでさえ正体のわからない環境というものを展示で表現するにはどうすればいいか，十数名の学芸員が泥沼のような議論を繰り返す中で，最後の展示がどうしたも決まらず，あげくのはてに，いったん頭を冷やして，学芸員各自が，自分の環境への思いを、展示を離れて文字にしてみよう，ということになりました。

このような原稿が何本集まってきても，それですっきり展示ができるわけではありませんが，博物館である以上，まして環境をあつかう以上，煮詰めた議論をして，博物館としての共通認識を持っておかなければならないと思います。そのような博物館作りのひとこまをお目にかけました。

展示と建築の実施設計はすでに終わり，もう起工式まで済ませてしまいました。問題の部分の展示プランもできあがっているわけですが，いつふりだしにもどるかもしれません。開館まであと二年余り，どんな博物館になるか楽しみにお待ちください。